

コンクリート用の透明な表面被覆工法

コンクリート素地の視認性が確保される表面被覆工法

国立研究開発法人 土木研究所
先端材料資源研究センター



○コンクリート構造物の維持管理：劣化と防食/補修

- ・維持管理時代にむけたコンクリート構造物の補修技術
- ・5年毎点検と直接近接目視の義務化

- ・コンクリート構造物の劣化損傷
 - ・塩害、ASR、凍害、中性化、化学物質、、、

- ・対策の基本
 - ・鉄筋の腐食抑制
 - ・劣化促進物質の遮蔽
 - ・密実なコンクリート
 - ・表面被覆、注入/充填

- ・新設、補修



○耐久性向上・補修対策としての表面被覆工とその課題

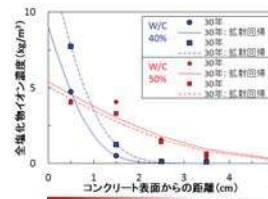
- ・目的と性能
 - ・劣化促進物質の遮蔽
 - ・(剥落防止)
 - ・景観、美粧



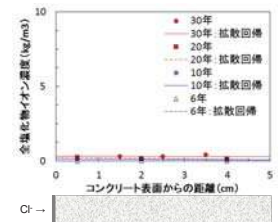
- ・メリット
 - ・劣化促進物質を比較的容易に遮蔽できる
 - ・施工後の外観がきれいになる
- ・課題
 - ・コンクリートの目視点検が困難になる
 - ・内部の塩や水を封じ込めてしまう
 - ・ひび割れの進展や滲出物の発見が遅れる

○表面被覆による耐久性向上

- ・30年間の海洋飛沫帯暴露-駿河海岸
- ・塩分の浸透



無塗装コンクリートへの塩分浸透



表面被覆(塗装)をすると
→ 塩分浸透は長期間抑制できる

○表面被覆にからむコンクリート構造物の不具合

表面被覆内部でのコンクリート劣化の進行 内在塩や下地不良による早期再劣化

- ・被覆内コンクリート損傷の解剖調査例



表面被覆工および断面修復工による経年によるコンクリート構造物の劣化に、部材損傷、膨れ密集、宮田敦士、佐々木敏、西崎利、コンクリート構造物の補修、修繕、アクリル樹脂論文報告集、日本材料学会、2014

コンクリート構造物の補修に関する研究、PC構造物の機能的メンテナンスに向けて、国立研究開発法人土木研究所 先端材料資源研究センター、第43回PC技術講習会、2015

○透明な塗膜を実現し目視点検を可能にする

<塗装無し> <従来エナメル塗装> <透明塗装(開発品)>



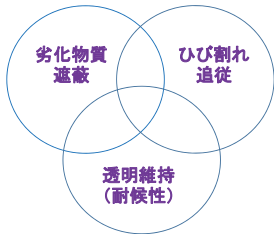
○表面保護対策の種類と特徴

	透明表面被覆 (本工法)	従来型(有色) 表面被覆	表面含湿 (シラン/ハイゾール)	はく離防止 透明	その他(ひび割れ抑制等)
劣化防止性能(特にひび割れある場合)	○	○	△	○	△
剥落防止	△	△	×	○	×
施工のし易さ	優	良	優	可	
点検・維持管理	優	可	優	優	優
コスト	良	良	優	可	

(○:機能を有する △:条件によっては有効 ×:機能を有さない)

○透明なコンクリート保護材料の要素技術 ～開発の視点～

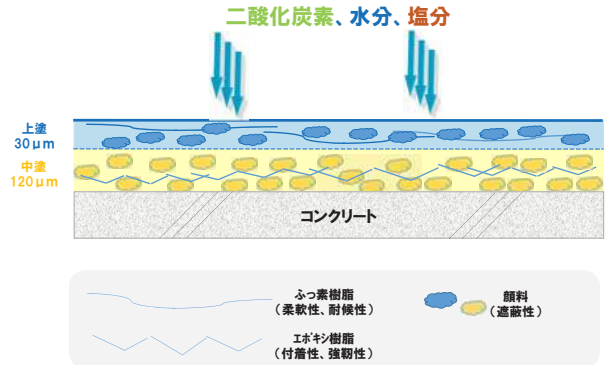
3つのキーとなる要素を塗膜に組み込む必要がある



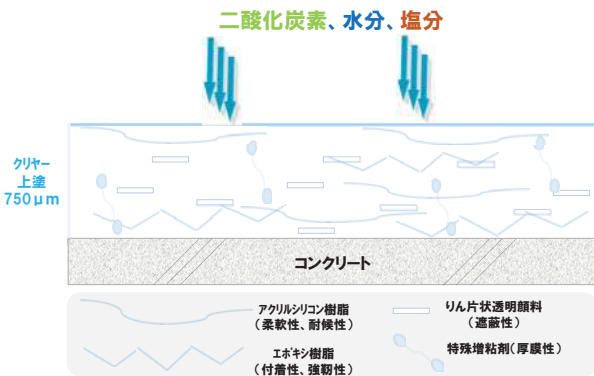
- ・腐食促進物質を遮蔽する樹脂および顔料の選定
- ・コンクリートに発生するひび割れに対する追従性を有する樹脂選定
- ・長期にわたり透明を維持する耐候性のよい樹脂の選定

本工法の透明な塗膜は、相反する事象に対しても最適なバランスをとり、必要とする膜性能を確立。

従来型有色被覆の遮蔽効果



透明な本工法被覆の材料新技術



○表面被覆材の基本性能

- ・コンクリート構造物の補修対策施工マニュアル(案)
- ・表面被覆・含浸工法編 が求める品質を満足

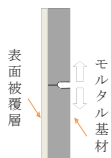
●表面被覆材の基本性能の例 表面被覆材に求める品質*等の照査

要求性能	照査項目	本工法	
塩化物イオン遮蔽性	塩化物イオン透過量	$0.34 \times 10^{-1} \text{ mg/cm}^2 \cdot \text{日}$ 以下	
酸素遮蔽性	酸素透過量	$4.7 \times 10^{-1} \text{ mg/cm}^2 \cdot \text{日}$	
水蒸気遮蔽性	透湿量	$0.4 \text{ mg/cm}^2 \cdot \text{日}$	
二酸化炭素遮蔽性	中性化深さ	0.0 mm	
ひび割れ追従性	塗膜の伸び	標準養生後(20°C)	0.65 mm
		標準養生後(-20°C)	0.62 mm
		促進耐候性試験後	0.56 mm
付着性	付着強さ	標準養生後	1.57 N/mm^2
		促進耐候性試験後	2.96 N/mm^2
		温冷繰り返し試験後	1.77 N/mm^2
		耐アルカリ性試験後	1.68 N/mm^2

* 土木研究所：コンクリート構造物の補修対策施工マニュアル(案) 表面被覆・含浸工法編

○ひび割れ追従性

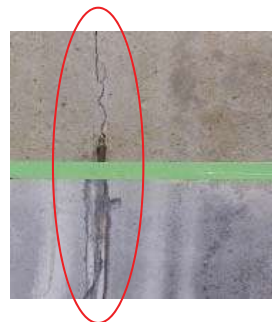
試験方法： ひび割れの入ったモルタル板に、本工法の材料を塗装し、塗膜を形成。29日前、23°Cで乾燥させた塗膜を標準状態とし、標準状態の膜を23°Cでひび割れ追従性を試験(常温試験)、標準状態の膜を-20°Cで試験(低温試験)、標準状態の膜にキセノンランプを700時間照射後23°Cで試験(促進耐候性試験)の3水準を実施した。(JSCCE-K 532-2010に準る)



条件	のび(最大荷重時)
常温試験	0.65mm
低温試験	0.62mm
促進耐候性試験	0.56mm

いずれの条件でも0.4mm以上の伸びがあり、コンクリート躯体の保護に有効塗膜は約1mmで破断

○視認性：実際のコンクリート面での塗装状態



塗装面

ひび割れがあるところに塗装して塗膜を形成。塗装面においてもひび割れが目視で十分わかる。(施工前よりも視認性が向上)

無塗装面

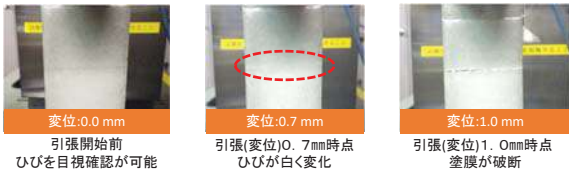


・視認性の定量的評価方法

→ 塗膜の隠れり度試験を応用した試験基準の提案

○視認性：ひび割れの可視性

試験方法：ひび割れの入ったモルタル板に、本工法の材料を塗装し、塗膜を形成。
7日間室温(23℃)で乾燥させた塗膜を、引っ張り試験機で両端を引っ張り、その時の塗膜状態の変化を観察した。

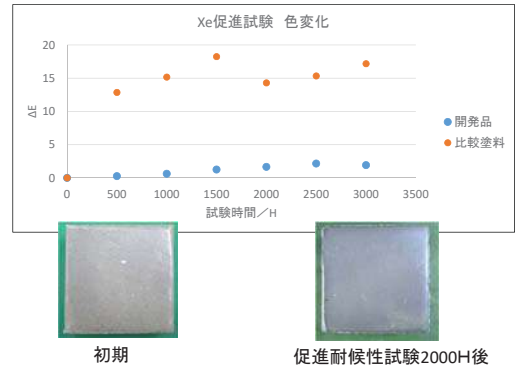


ひび割れを十分目視で確認することができ、クラック追従性があり、透明を維持する樹脂を使用することの効果が認められる。
ひび割れが拡大し、0.7mm(変位)になると塗膜の外観異常(白化)が生じ、ひび割れの点検観察を容易にする効果があります。

○視認性：耐候性

促進試験の他、屋外暴露を実施中

試験方法：7×7 ISOモルタルに各仕様を塗装し、23℃50%RHで28日養生したものを、JIS K 5600-7-7(キセノンランプ法)にて促進試験後、2000Hまで500H刻みで色相を測定した。



⇒促進耐候性試験後も大きな色変化がなく、視認性を維持できている。

○塗装仕様と施工工程

工種	製品名(一般名称)	使用量(kg/m ²)	膜厚(μm)	施工方法	塗膜乾燥(23℃)
底塗り	サンダーレン・シナー拭き・ブラシやエアブロー、その他規定された工法により、段差修正やレイタンス・塵分・塗膜分などの異物や油分を除去し、塵に漬した状態にする。また、大気塵、微細塵(油)や雑水がある場合は別途除塵処理、塵めし等の高圧洗浄機で土水、露水処理を事前に実施する。				
プライマー	タフガードクリアープライマー(アクリル樹脂塗料プライマー)	0.12~	—	ほけローラー	30分~7日以内
パテ	タフガードクリアーパテ(柔軟形特殊クリアーパテ)	0.36	—	コチヘラ	16時間から5日以内
上塗り	タフガードクリアー上塗り(柔軟形特殊クリアー塗料)	0.92	750	コチヘラ	—

※アクリル系の上塗り塗料の使用量は、コンクリートの露地の状態によって大幅に変動します。 ※いずれの工程も順番にて塗装ください。



30分以上
1日以上
2日間で塗装が完了します。

従来工法では4日間かかっていましたが、工程短縮が可能となります。

○道路橋下部工での施工例

◎2015年 中国地区

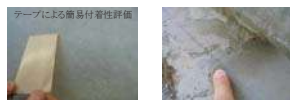


○道路橋下部工での施工例

◎施工箇所の1年経過後の状態



ひび割れ部などのコンクリート状態が目視確認可能



供用中の異常(付着不良や端部めくれ等)はみられていない

○適用事例

2017年 関東地区



○問い合わせ先

国立研究開発法人 土木研究所
先端材料資源研究センター(MaRRC)先端材料・高度化担当
TEL 029-879-6763
〒305-8516 茨城県つくば市大字南原1番地6
URL <http://www.pwri.go.jp/>

日本ペイント株式会社
顧客営業部 第二営業グループ
〒140-8677 東京都品川区南品川4-7-16 TEL:03-3740-1220
技術本部 鉄構塗料技術部 設計グループ
〒140-8675 東京都品川区南品川4-1-15 TEL:03-3740-1141
URL <https://www.nipponpaint.co.jp/>